

# 勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十二号

2010.6.15

小論・研究余滴・随想



書写を考える楽しさ

家入博徳

島田雅彦の文学と〈恋物語〉の誕生

小林孝吉

ベトナム・ハノイの観光空間

鈴木涼太郎

『生命讃歌 お伽噺』に寄せて

江口孝夫

南蛮菓子(二)

—くいのものの語源と博物誌—

小林祥次郎

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

新刊・近刊ニュース

- ・『京都の地名検証3』  
風土・歴史・文化をよむ
- ・『花と言葉の散歩道』  
車椅子オヤジの  
絵手紙集
- ・立松和平『旅に棲んで』  
全小説5
- ・MLA連携の現状・課題・将来

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

# 書写を考える楽しさ

家入博徳

(國學院大學兼任講師)

書写を考える楽しさ

拙著『中世書写論』が刊行されて二カ月程経ったが、幸いにもすでにいくつかの図書館や大学に置かれているようである。近くの図書館で見つけたところ、「書道」のコーナーに置かれていた。また、出身大学では「中世文学」のコーナーに置かれている。施設によってどの分野のものとして拙著を位置づけるかを知ることができ、楽しい。

## 俊成・定家の所属する社会

拙著は主に藤原俊成・定家の書写についての考察である。彼らが生きた時代は貴族中心の社会から武士の社会へと、ちょうどその転換期にあたる。慈円が『愚管抄』で「武者ノ世ニナリニ

シ也」と述べるように、武士が政治の中心に進出し、貴族は衰退していく。

このような時代の中で、貴族たちは社会における自己の存在を主張し、自身の地位や「家」を守ろうとする。家伝や家学が次々と成立していったのにはこうした時代背景がある。俊成・定家も同様に、貴族社会において、さらには活動の舞台である歌壇において自己の存在を主張する必要に迫られる。

## 俊成・定家の書写とは

俊成・定家の書写の主な目的は、多くの資料の所持にあつた。それは、歌壇において敵対する勢力よりも多くの情報を蓄える必要からだ。

定家の場合はそれだけではない。自

己主張をし、自身の地位や「家」を守るため、家伝や家学を目に見えるものとして残そうと考えた。それが書写本であつた。今日見られる多くの書写本は、そうした定家の意識の現れである。

したがって、定家の書写には多くの工夫がみられる。一つは書風だ。定家の独特な文字表現は、当時の他の筆跡と比較しても、決して「上手」とは言えないが、一度見たら忘れられない。書風が「定家」を主張しているのだ。また、定家は自身の著である『下官集』の中で、書写についての規則を詳細に設定している。当時、他にも書写についての規則を定めたものもあるが(藤原清輔著『袋草紙』、藤原伊行著『夜鶴庭訓抄』)、定家ほど細かくはない。定家は書写に対しある意味執着した。それは書写が自己の存在を左右するものであつたからだろう。

このように見てくると、書写を考え

⇒目次に戻る

ることは、書かれた文字はもちろんのこと、当時の社会状況や言語意識等を考えることであり、それはすなわち、書写が多くくの学問領域の問題を有していることになる。

近世に「国学」という学問領域があつた。これは今日でいう「日本文学」「日本語学」「歴史学」「書道史」等を区別することなく、過去に書かれたものについて研究することだ。書かれたものを広い視野で研究することが当然であつたのだろう。その後、橋本進

吉博士・山田孝雄博士・吉沢義則博士等の先学達も同様の視野で研究している。彼らは日本語学者として著名であるが、同時に日本文学者であり歴史学者でもある。それは、書かれたものを多様な視点から捉え考えてきたからである。

書かれたものと対峙する時、広い視野で総合的な研究が今後なされるべきではないかと思う。私はそのような学問を「書学」(書かれたものを研究する学問)と考えているが、今後多くの人や



# 中世書写論

## 俊成・定家の書写と社会

家入博徳 著

A5判上製・定価一、二六〇〇円(税込)

「書写」という視座から日本文化のあり方を再考する。各種資料の筆跡や書写形式の綿密な検証により、俊成・定家の書写に見られる「独自性」を考察。その書風や書写に対する意識を明らかにする。また、以降、享受・継承され、カノン化されるまでにいたる「定家自筆」の問題を社会的背景から読み解く。



### 序 書写の意識

#### 第一編 藤原俊成と書写

俊成と寄合書／書写の方法①(寄合書)／書写の方法②(書写形式)／書写の工程／書写状態から見る読者への配慮／書写に対する意識

#### 第二編 藤原定家と書写

『定家自筆』の問題①(『近代秀歌』)／『定家自筆』の問題②(『基俊集・登蓮集』)／『定家自筆』の問題③と書写の工程(『仲文集』)／『定家自筆』の問題④と書写の工程(『更級日記』、『土左日記』)／定家の書写と身体状況／定家周辺における「自筆」のあり方／書写と社会「自筆」に対する意識と意味

#### 第三編 書写本享受の姿勢

定家以後の和歌の書写／『源氏物語奥入』の享受／定家本『源氏物語』の享受／『定家自筆』の権威化と定家流

#### 結論 書写をめぐる問題

参考文献・引用影印・本文資料

# 島田雅彦の文学と〈恋物語〉の誕生

小林孝吉

(文芸評論家)

## 時代代表の文学

『島田雅彦 〈恋物語〉の誕生』(新鋭作家論叢書)二〇一〇年三月三〇日発行)の書き下ろしを進めながら、私のなかに〈時代代表の文学〉という言葉が浮かんでいた。文学は、いつも作家の生きる同時代の影響を色濃くおびていることはいうまでもないが、なかでも島田雅彦という作家はとくにその傾向が際立っていないだろうか。

島田雅彦は、二〇世紀の最後の年に、『自殺』によって自らに〈自由死刑〉を科す『自由死刑』(集英社、一九九九年)を刊行し、そのなかに「自由死刑とは何か?」というエッセイを収めている。「失われた二〇年」と象徴的にいわれる世紀末の風景のなかで、彼は自分の小

説について、こう述べている。——私

はこれまで「未来予言的」に小説を書き、時代の底流にひそむものを描きだそうとしてきた、私は炭坑に連れて行かれる「カナリア」なのかもしれない、と。

島田雅彦は、二十代の初めに『優しいサヨクのための嬉遊曲』(『海燕』一九八三年六月号)で、八〇年代の「左翼」ではない〈サヨク〉と、均質化した郊外の恋物語から作家としてスタートし、高度消費社会とポストモダンの潮流のなかで、その文学的先端を走りつづけ、ベルリンの壁・社会主義の崩壊、そして「9・11」とともに幕開けした「新しい戦争の世紀」まで、ほぼ四半世紀の間に膨大な作品を発表してきている。

## 〈自由〉〈死〉〈恋〉

——三つの時代代表

本書においては、私は「ポストモダンの入口で」を序論として、第一部「ポストモダンと高度消費社会」では、『優しいサヨクのための嬉遊曲』から、『愛を表象とした』『未確認尾行物体』、八〇年代の物語『夢使いーレンタルチャイルドの第二都物語』までをおもな対象とした。第二部「失われた十年」と『暗い森』のなかで、では、超架空都市を描いた『ロココ町』から、一四歳の「暗い森」を先見的に描いた『君が壊れてしまう前に』、第三部「新しい世紀」と〈恋物語〉の誕生」では、〈恋物語〉の誕生を告げた「無限カノン」という長篇三部作『彗星の住人』『美しい魂』『エトロフの恋』を中心に、最新作『徒然王子』までを、私は時代代表の文学として読み解こうとした。

島田雅彦の小説を時代代表の文学と

して見るとき、八〇年代から世紀を挟んで現在まで、世界も、日本も、どれほど大きく変わったことだろう。「大きな物語」の崩壊を告げた八〇年代、自由の流れが巨大な歴史の潮流を生んだソ連・東欧の激変と市民革命、湾岸戦争とともにじまった世紀末の九〇年代、歴史の怨念が噴出した「9・11」、日本社会では、バブル経済から新しい貧困の蔓延した格差社会へと大きく変貌している。

島田雅彦の文学は、八〇年代は〈自由〉、九〇年代は〈死〉、二〇〇〇年代は〈恋〉と、大きくはこの三つの時代代表を小説の核としてきたのではなかったか。なかでも、「無限カノン」三部作は、源氏物語以来の日本文学畢生の〈恋物語〉として、この困難な世紀に屹立しているように見える。この〈恋物語〉は、歴史のなかの地下水脈となる〈血の泉〉と、未来の〈いのち〉をつなげ、恋のDNAが見えざる

大河をなして流れている。『優しいサヨクのための嬉遊曲』の主人公・千島姫彦と逢瀬みどりの郊外の模造的恋物語は、二〇年以上の時代の試練を経て、首都の森・皇居や北の果て・エトロフを舞台にした、日本近代一〇〇年の〈恋物語〉の誕生へとたどりついたのだ。

## 「無限カノン」三部作と

### 〈恋物語〉の誕生

「無限カノン」三部作は、一八九四年長崎に寄港した軍艦に乗ってきたアメリカ海軍士官ピンカートンと、悲劇的な結末をたどる芸者蝶々夫人との日米を架橋する恋物語を源流に、その子どもJBと神社の宮司の娘・野田那美の恋、その息子で満州で生まれた不遇の作曲家・野田蔵人とジェネラル・マッカーサーの愛人との恋、その息子カヲルと皇室へ入ることになる不二子との恋、さらにそれぞれの恋物語の主人公たちの周辺を彩る無数の恋物

語——これらの恋と血の泉は、未来へと向かって永遠に途絶えることのない〈恋物語〉(『自由の水脈』)として、滔々と流れつづけていく……。

これらの恋物語の華は、カヲルと皇太子と結婚する運命を生きる不二子の恋であろう。現実には、不二子との恋が果たせず一人黄泉の鳥・エトロフに渡ったカヲルは、ここでニーナというロシア人の女性との恋に癒されるとともに、夢のなかで不二子との恋物語を実現することになる。第二部『美しい魂』は、次のような一行で終わっている。——〈恋人たちの美しい魂は必ず、忘れられた頃、蘇る〉。また、第三部『エトロフの恋』のあとがきに、島田雅彦は、こう書いた。〈……それでも恋は死なない〉と。

二〇〇八年一月から翌年二月まで朝日新聞に連載された『徒然王子』は、王子テツヒトが憂愁の森を捨て、塵が谷というホープレスタウンから歴史を

×ルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

前世へと遡る遍歴の物語である。ここで王子は、最初は二二五〇年前の前世へ行き、そこでヒナという森の少女と恋をし、それから一四〇〇年後の平氏の集落での恋物語へ……これらを含む四つの前世と、王子として五つ目の人生を経験する。やがて、このホープレスタウンは、ホープタウン（新しい郊外）へと変わっていくように、『徒然王子』の時代表象は〈希望〉なのだ。時代表象の文学、あるいは時代のカナリアとしての島田文学は、これからどこへ向かおうとしているのか。〈恋物語〉と〈希望〉へとたどりついたあと……それは日本社会の未来と深く関わっているであろう。



新鋭作家論叢書

島田雅彦 〈恋物語〉の誕生

小林孝吉 著

四六判上製・定価三三〇円（税込）

未来にあるものは、自由、死、そして恋。全共闘の時代から高度消費社会を経て9・11まで、常に世界と斬り結び、〈時代表象の文学〉として現代とコンタクトし続ける作家を、主要作品の解説とともに徹底解明。

序 ポストモダンへの入口で

第一部 ポストモダンと高度消費社会

左翼から〈サクソク〉へ——『優しいサクソクのための嬉遊曲』

非国民から〈ヒコクミン〉へ——『亡命旅行者は叫び泣く』

世界が滅びる日——『夢遊王国のための音楽』／構造人間的自由——『僕は構造人間』

権力者のパロディ——『ドンナ・アンナ』／八〇年代表象としての〈エイズ〉——『未確認尾行物体』

八〇年代の物語——『夢使い』／レンタルチャイルドの第二都物語

第二部 『失われた二〇年』と『暗い森』のなかで

ポストモダンから『暗い森』へ／超架空都市と可能世界——『ロコ町』

パロディと倫理性——『彼岸先生』／世紀末世界と預言者——『預言者の名前』

『失われた二〇年』の中間で——『忘れられた帝国』／新たな郊外の物語——『子どもを救え！』

自由死刑と復活——『自由死刑』／一四歳の暗い森と死——『君が壊れてしまっ前に』

第三部 『新しい世紀』と〈恋物語〉の誕生

『9・11』と不可能性の時代／〈恋物語〉の誕生——『書屋の住人』／第一部

〈血の泉〉と〈美しい魂〉——『美しい魂』／第二部

よみ黄泉の島にて——『エトロフの恋』／第三部

焼跡の〈退廃〉と恋——『退廃姉妹』／ホープレス・タウンからホープ・タウンへ——『徒然王子』

【好評既刊】（四六判上製・定価各三三〇円）

村上 龍 『危機』に抗する想像力 黒古一夫 著

柳 美里 『柳美里』という物語 永岡杜人 著

小川洋子 見えない世界を見つめて 綾目宏治 著

月光

月光2

発見！宮沢賢治 「海岸は実に悲惨です」

福島泰樹・立松和平・黒古一夫・太田代志朗・竹下洋一 編  
A5判並製・定価二六二五円（税込）



新発見資料を中心に、本当の賢治に迫る。賢治が大木実宛てた手紙の内容とは……？  
新資料を本格的に紹介するほか、福島泰樹、立松和平、高橋千劍破、牛崎敏哉など作家、詩人、研究者が総力を挙げて賢治文学の魅力を解剖する。保阪嘉内の子息、保阪庸夫氏の貴重なインタビューも収録。

- 小田 久郎 回顧録
- 立松 和平 小説「真夜中の廃墟」
- 保阪 庸夫 私が友保阪嘉内、私を棄てるな。
- 大平 茂樹 賢治の法華教
- 山口 泉 賢治の思想
- 望月 善次 文学者でもあった生涯
- 清水 正 賢治と「ものあはれ」
- 原田 信男 宮沢賢治とドストエフスキー
- 伊藤 一彦 菜食信者・宮沢賢治
- 高橋千劍破 賢治、短歌の秘密
- 堀本 裕樹 蒼き修羅
- 立松 和平 詩歌編
- 葛原 洋一 現代詩
- 竹下 洋一 短歌 異聞「風の又三郎」

- 松野 志保 星の時間
- 太田 代志 朗銀河鉄道の夜
- 福島 泰樹 紹介「賢治文庫」
- 大木 実 宛葉書・写真
- 山下 聖美 宮沢賢治と大木実
- 牛崎 敏哉 新発見口語詩草稿
- 王 敏 「停車場の向ふに河原が
- 神山征二郎 賢治の映画
- ますむらひろし 「おくりびと」テクノノ」
- 吉良 知彦 賢治の幻燈
- ……ほか、作品多数。

月光1 中原中也

シャルルヴィール II  
メジエールからの出発

A5判並製・定価一七八五円（税込）  
表現の王道を歩む総合文芸誌、新創刊。言葉は滅びてはいない。言葉は文学を生む。産み続ける。携帯電話の荒野の闇へ、機関銃よりも速く言葉を撃ち続ける若者たちよ、全共闘世代の闘った男や女達よ、引き籠もらずに出てこい。発言せよ、言葉を発言せよ！

- 福島 泰樹 創刊の辞
- 高坂 明良 風の挽歌
- 宇佐 美斉 一九三〇年代の日本における
- 飯山 雅英 報告 中原中也、
- 村上護 福島泰樹・中原中也私史録
- 野口 達郎 「中原中也」のいる風景
- 小松 剛 魔隠論 中原中也説「永遠」論
- 佐藤 泰正 月光のこと、透谷のこと
- 北川 透 月光の詩人 中原中也
- 福島 泰樹 東京、感傷紀行
- 野口 武彦 中原中也帝都慕情
- ……ほか、作品多数。

# ベトナム・ハノイの観光空間

鈴木涼太郎

(相模女子大学文学部専任講師)

ベトナム・ハノイ、大教会界隈

発展著しいベトナムの首都ハノイ。その中心部に、ハノイ大教会がある。フランスによる植民地支配を経験したこの街にネオゴシック様式の聖堂が完成したのは、二〇世紀初めのこと。本年四月に刊行された拙著『観光という〈商品〉の生産——日本とベトナム旅行会社のエスノグラフィ』にかかわる調査で渡越する度に、筆者は必ずこのハノイ大教会周辺を訪れ、特に目的なく、ぶらぶらと歩き回ることにしてきた。

この界隈は、ハノイ市内でも外国人観光客が最も多く集まる地区の一つである。周辺には、土産物店やレストランが軒を連ねており、地図を片手の観

光客の姿を数多く目にする事ができる。さらにこの地区は、ハノイ市内の他の観光地と比べて「おしゃれな」場所とされており、ショッピングやレストランは、在住外国人がデザイナーやプロデューサーであることが多い。ガイドブックでは、「ハノイ最新の洗練されたスポット」とも称されている。

リークオックス通り

イタリアン・レストラン

教会前の広場を北へ向かって徒歩数分のリークオックス通り沿いに、Pというイタリアン・レストランがある。これまでに私は、度々ここで食事をしてきた。

とはいっても、このレストランの料

理が特別美味であるかという点、決してそうは思わない。とりたてて内装が洗練されているわけでもない。周囲には、ほかに評判の店もある。

ではなぜ、ここに立ち寄るのか。それはこの場所が、観光地ベトナムの現在、ハノイのツーリスト空間を凝縮しているように思われるからである。

店内で食事をしている人々の多くは欧米人観光客である。一方で、最新の「韓流」ファッションで決めたベトナム人カップルもちらほらいる。観光客にとつては、ベトナム料理に疲れて一息つける場所、地元若者にとつては、デートで利用したい「とつておきの店」なのであるうか。

店の看板やスタッフの制服に付されたロゴをみると、どうやらこのレストランは、一九九〇年代に香港で創業したチェーン店らしい。メニューを開いてみる。「当店のおすすめ」のページにあるのは、イタリアンではな

⇒ 目次に戻る

く、なぜかアメリカ風の「ビーフー〇〇%ハンバーガー、ポテトつき」。ワインリストで高値を付けるのは、本場フランス・ボルドーではなく、チリ産ワイン。ちなみに店内には、一九八〇年代のポップスが大量で流れている。そしてケータリングメニューには、「UDON」の文字が。

「観光」を知るための窓

観光活動の微細な現場に目を向けると、ときとしてそこは、一見不可思

議ともいえる光景が広がっている。香港発のイタリアン・レストランチェーンでハンバーガーを肴にチリワインを飲む観光客とハノイっ子。これは決して、例外的な状況とはいえない。観光という国境を越えた人間の流動の中で、特定の事物が本来の場所から離れ、まったく異なる形で消費される。時間的にも地理的にも、ちぐはぐで、矛盾に富んだ、それゆえツーリスト向けの空間だからこそ可能な状況。わが国では近年、政策的課題、とくに産業

振興策としての観光に注目が高まっている。それに比べれば、ハノイのレストランで目にする風景はいかにも瑣末な出来事である。もちろんそれを、取るに足らない、本来的ではない、つまらぬものとして切つて捨ててしまうこともできよう。しかし私には、むしろこのような混沌の中にこそ、観光をより深く知るための窓があるように思える。



## 観光という〈商品〉の生産

日本とベトナム 旅行会社のエスノグラフィ

鈴木涼太郎著

A5判上製・定価五〇四〇円(税込)

海外へ出かける日本人旅行者の数、年間およそ二五〇〇万人。そのうち約五〇〇万人が利用するパッケージツアー。非日常空間への「夢」がまった「商品」は、いかにして創られているのか。パッケージツアー企画の過程を、日本とベトナムの旅行会社におけるフィールドワークから描き出す。

はじめに

序章 文化仲介者としての旅行会社という視点

第1章 〈商品〉生産の現場

第2章 旅行業界のしくみと競争環境

第3章 旅行商品造成業務

第4章 旅行商品造成業務における「現場の知識」

第5章 パッケージツアーの編集

第6章 商品素材の選択とイメージの生産

第7章 「商品」が媒介する日本とベトナム

第8章 ベトナム行きパッケージツアー企画をめぐる諸環境

第9章 パッケージツアー「たっぷり遊べるハノイの日間」ができるまで

第10章 ランドオペレーターの商品素材開発と観光地

「マーケティング」の帰結としての「エコツアーズ」

終章 「伝統的な陶芸の村」を演出する水牛車



## 『生命讃歌 お伽噺』に寄せて

江口孝夫

(元東京成徳大学教授)

だいきくさま

前回の『ありがとう宣言』につづき、この書も興味深く、なつかしい思いで読ませていただいた。著者は五十年以上、あるいは七十年もの間、時折りふり返り、なじんでおられたのだろう。考察が深い。たんに昔をよみ返らせるばかりでなく、現代の政治・経済にもからめて考察している。

この面は大人の観点で、子供の思考の及ぶ範囲ではないが、お伽噺を思考の種子として、各人の心の土に埋めておかれたら、これまたそれぞれの人生に生かせるだろう。

わたしのお伽噺の世界も、遠い昔になつてしまい、いま思い返してみても、童謡のリズムによつて、再現されるも

のである。

「大きなふくろをかたにかけ、だいきくさまがきかかると。」だいきくさまはやさしいかみさまとして、子供のなじみの神様だった。

これを著者は、「国家権力をなしとげた大和朝廷よりも、むしろ戦わずして国を譲った側の大黒主命に親しみをもつ」と。

また「降<sup>お</sup>ろした荷物が気がついてみたら、いつの間にか自分を守っているものであるを知る」と。これは養護教育に一身を捧げてこられた人の実感を実証としている。

## 桃太郎

桃太郎については、犬・猿・雉と、

## 笠地蔵

「一般大衆にとつて一番よりどころとなるものは「親しみ」の心情である。民衆の救いは、悟りでもなければ、特別な教えの信仰でもない。心から親しむことの出来る深い共感に根ざしている」という。

「凡ての人をよく見るためには、凡ての人と同じ目の高さに立つこと、具體的にいえば、誰よりも低い眼の高さ、一番謙虚な低い処に身を置くことである。」ともいう。

笠売りのおじいさんが、売れ残りの笠を七体の地藏尊にかぶせてやった。六個しかなかったので、残る一体には自分の頬かぶりをぬいで、かぶせてやった。すると石の地藏さんが歩いて恩返しにくるといふ後日譚までついている。

## 無筆の手紙

この昔話のとなちのひらめきというか会話は、現代の小説以上に新鮮である。

出逢いの働き、内部からの改革の必要性を読みとっている。

日本の伝統・昔話が第二次世界大戦後、締め出され、桃太郎はその最右翼、やり玉の最先端だった。明治三十三年の『幼年唱歌』の「モモタロウ」が、明治四十四年の『尋常小学校唱歌』には、「そりや進め そりや進め、一度に攻めて攻めやぶり つぶしてしまえ鬼が島」と、書き換えられている。この勇みは日清・日露の勝利の奢りだろう。これが一挙に打ちひしがれたのだ。

## 三ねん寝太郎

わたしはお伽草子のなかの『物くさ太郎』になじんでいたが、ここの「三ねん寝太郎」は、そんな素つ頓狂な男ではない。お上<sup>かみ</sup>に対し、十二分に対処しているのである。著者はこの民話について、「農民の愚の深さ」と「貧しさののりこえる活力」を見出している。

寝太郎は近所の人も誉めるくらいに文字の書けない母が隣村に嫁入りした娘が気になる。そこでついでを頼んで、嫁の処へ品物を届けてもらった。品物とは、「はげちょうの半端ものの重箱、大きさが違つて重ね合わせのできないその二つに、糠をひとつまみ入れたものだった。娘はそれを見、すぐわかった。「この重<sup>じゅう</sup>（中）合わんが、ちと小糠（来ぬか）」と読みといた。そこで娘は、母に一面に墨をぬりたくつたものを渡した。そう現代の書家岡部青風の『墨象』のような物を渡してやった。母はそれを読みとき、すっかり安心した。さてどう解いたのだろう？

それにもう一つ。この章には野口英世の母が、アメリカにいる英世に送った手紙が載せられている。無筆なので片仮名に平仮名がまざるものの、思いは息づまるほどに迫ってくる。帰国後、英世はどのような歓迎会、会合にも母を同席されたという。ともあれ、この一文の記録があるだけでも、保存して

おきたいと思う本である。

### 《余瀆》

こぶとりじいさん・一寸法師・桃太郎に出てくる鬼は隣人か、戦いの場を書かない、どこか抜けているようでもあり、親しめる鬼である。

仏像四天王の邪鬼は平伏した台座であつたり（法隆寺金堂、頭や腰を踏んづけられたり（東大寺戒壇院）、坐し両手をつき額などを踏まれた姿（教王護国寺（東寺））であつて興味深い。

絵画では百鬼夜行絵巻、大江山絵巻の酒吞童子など妖怪へのデフォルメを見るが、これには恐ろしく強さなど湧かない。

三十三間堂に風神雷神の像があり、俵屋宗達はそれを基に『風神雷神』を描いた。その鬼形の風雷神が、現代の我々の鬼の姿になつてゐる。これはまた遠く昔話・民話・お伽噺の鬼のイメージであつたらう。



## 南蛮菓子(二)——くいものの語源と博物誌——

### 小林祥次郎

### ○コンペイトウ

日本史上の有名な人物でコンペイトウを最初に口にしたのは織田信長のようだ。京都にいたイエズス会の宣教師ルイス・フロイスが一五六九年六月一日に豊後府内(大分市)にいた宣教師ベルシヨール・デ・フィゲレイドに宛てた手紙の中に、信長と会つた時に「予はコンフェイトス入のフラスコ一つ及び蠟燭数本を贈りたり」(村上直次郎訳『耶穌会士日本通信』)と記している。二条城の建設現場で四月のことと推定されている。

コンペイトウはポルトガル語 *confeito*、糖菓、ボンボン、キャンデーの意味で、砂糖で覆われた種子の意味もある。最後のものが金平糖に近い。

### 人間愛叢書

## 生命讃歌 お伽噺

石川洋著

四六判並製 定価一八九〇円(税込)

したぎり雀、浦島太郎、かぐや姫……

我々が親しんできたお伽噺には「生きる力」が描かれていた。

素朴でたくましく、庶民の信条をさらけだしながら、人間生活の希望を語りかけられるお伽噺。

それは、現代を生きる我々の救いともなる。

まえがき

- 第一話 花咲かじいさん
- 第二話 したぎり雀
- 第三話 天の羽衣
- 第四話 浦島太郎
- 第五話 おむすびころりん
- 第六話 大黒様と因幡の白兔
- 第七話 三ねん寝太郎
- 第八話 つるのおんがえし
- 第九話 うぐいすのいちもんせん
- 第十話 一寸法師
- 第十一話 びんぼう神とぶくの神
- 第十二話 こぶとり
- 第十三話 かぐや姫
- 第十四話 やまんばのにしき
- 第十五話 笠地蔵
- 第十六話 桃太郎
- 第十七話 かちかち山
- 第十八話 さるかに合戦
- 第十九話 無筆の手紙

### 人間愛叢書

## ありがとう宣言

石川洋著

四六判上製 定価一八九〇円(税込)

ありがとうといえ

ありがとうが見えてくる

ありがとうが見えてくれば

ありがとうあかしがあらわれる

いのちの真実と愛に目覚め、感謝の生涯を捧げる感動の物語。

一木一草を慈しむ日本人の心。障害者やカンボジアの難民たちとの触れあい、

人生を変えた師たちとの出会い。無手の聖尼・大石順教尼、マザーテレサ、

坂村真民などから学んだ「生きる」ということ。

人生において究極に大切なものは、「こめんなさい」と「ありがとう」である。



キンピラにこじつけたものだ。

『和漢三才図会』(造饌)に、作り方を、糖花(こんべいたう)は、砂糖に麴(小麦粉)を少しばかり入れ、煎つて膏のようにし、別に銅鍋で胡麻を炒り、中へそろそろと先の糖膏を入ると、胡麻一粒ごとに衣が付くのは奇妙だ、これを指で押し丸め、鍋に粘着する糖屑を刮げ取り、粗い粉末にして米屑のようにして転ばせて、また糖膏を入れて団丸にすると、細かないばいば(足と言う)が生ずる、潔白なものだ、長崎の人は上手に造る、京都・大阪でも造るがやや劣る、と説明している。井原西鶴の『日本永代蔵』(五二)に、長崎で貧しい町人が、胡麻を砂糖で煎じ、幾日も乾燥させた後、炒り鍋(耳と足の付いた浅い鉄鍋)にまいて炒ると、温まつて行くにしたがって、胡麻から砂糖を吹き出し、自然に金平糖になった、とある。享保三年(一七二八)に出た『古今名物御前菓子秘伝抄』には、水砂糖を煮

メルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

溶かして煮詰め、別の平鍋に芥子けいしの実を入れて弱火にかけ、煮詰めた砂糖を少しずつかけて茶釜で何度もかき回すと、大きな苺のようになる、とある。胡麻から芥子になった。わたくしもかなり前に芥子を入れると聞き、齒で噛み割って確認したことがある。

ところが、今のコンペイトウには芥子はもちろん胡麻も入れていないようだ。手元にあるもののラベルに記してある原材料名には、「砂糖・香料・着色料」としか書いてない。割ってみたが何も無い。いったいどうやって角を出させているのだろうか。

中国にも似たような菓子があつたようだ。明に遣臣で日本に亡命して水戸光圀に仕えた朱舜水が、中国の龍纏はコンペイトウで、中に入れるものによって名を付ける、松の実なら松纏、茶なら茶纏と言々と述べている(朱氏談綺・下)。

思うのだが、著者の久米は自分の知っている語形で書いたのだろうか。

明治八年に出た永峯秀樹あひらひら『暴夜物語あつた』(一)(アラビアンナイトの最初の翻訳)には、「或時此商人緊要ノ事アレバトテ、一隻ノ馬ニ打跨ガリ、背後ニ二個ノ布袋ヲ綁着ケ、布袋ノ裏ニハ乾餅カクパン(左振り仮名「ビスケット」)数個ノ鳳梨トヲ貯ハヘ、遠地ニ旅セシガ…」とある。これが英語の発音に近い。

慶応三年(一八六七)十月の『万国新聞』に出た広告に「パン、ビスケット、ポットル、此品私店に御座候。お求ねがひたま奉願ほうがん。横濱元町壱丁目中川屋嘉兵衛」とある(石井研堂『明治事物起原』による)。

『明治事物起原』には、風月堂乾蒸餅製造之要旨という摺り物に、明治元年六月に風月堂が薩摩藩から兵糧麵包の製造を命ぜられて、黒胡麻入りの麵包を携帯に便利のように作つて五千人分を納め、薩摩藩の兵は磐城平から若松の関いまで、この麵包を用い、

## ○ビスコウト

西川如見『長崎夜話草』1719(五)の長崎の物産を列挙する中に、「南蛮菓子色々」として、カステラポウル花ポウル コンペイト アルヘル カルメル ヒリヨウスなどと並んで、ビスコウトが出ている。

これより古く、一六〇〇年以前に西九州のイエズス会修道院で書かれたかと言う『南蛮料理書』という本には、「びすかふと」は甘酒で麦粉をこね、形を作つて膨らまして焼き、引き割りにして細かにして乾かす、とある。これではパン粉のようで、ビスケットとは思えない。他の南蛮菓子に比べるとあまり普及しなかつたようで、文献にはほとんど出てこない。

ビスコウトは、ポルトガル語 *biscoito* (ビスコウト) または *biskioio* (ゴスコイトウ)、現代では *biskioio* が普通で、ビスケット、クッキーのことだ。その語源はラテン語の *panis biscuitus*

その後風月堂は率先して西洋菓子を作り、またビスケットを作つて世の需要に応じた、とあることが出ている。明治十三年に出た川島忠之助あつた『八十日間世界一周』(後編第二十五回)に、桑港(サンフランシスコ)の旅館で「処々ニ乾肉、蠣、鱈、糲菓、牛酪ノ類ヲ堆ク盛り上ゲ人ノ随意ニ採リ食フニ任ス」という

ことがあると記す。この本はフランス語から訳したと言われているが、英語のビスケットになつて一般的になつたからだろうか。

J・C・ヘボン(Hepburn)の『和英語林集成』の英和の部で BISCUIT は、慶応三年(一八六七)の第一版には載らず、明治五年の第二版では「カタイパン」、明治十九年の第三版では「カタイパン。クワシ(菓子?)パン」としている。

なお、キャラメルについて『森永製

で、二度焼いたパン、bis は二度、otus は coquo (料理する、焼く)の過去分詞だ。低温と高温とで二度焼いて保存食とした硬いパンに由来するようだ。英語のビスケット(ビスケットのほうに近い)はフランス語 *biscuit* (ビスキュイ)を借用して発音だけ変えたものだ。アメリカでは *cracker*、*cookie* と言う。

明治になつてほぼビスケットに落ち着くが、明治初年にはまだいろいろと揺れていた。

岩倉具視大使らの外遊の記録である久米邦武『米欧廻覧実記』(二・四〇)の明治五年十月二十五日の条に、イギリスのウレッチングのビスコイト製造場を見学した記事があり、「ビスコイト」ハ、二度焼煎餅ノ義ニテ、乾餅ト訳ス、西洋ノ風俗ニテ、食後喫茶、及ビ咖啡ノ時ニ用フル、干菓子ノ代用ナリ」とある。ここではポルトガル語に近いビスコイトだ。イギリスでのことだから、現地ではビスケットだつたと

菓一〇〇年史』を閲覧したので、前回

の追加を加えておく。森永太郎が森永西洋菓子製造所を創設したのは明治三十二年八月十五日で、そこにはキャラメルを延ばすロールやカッターがあつた。開店用の引札(宣伝用のちらし)の中に「フレンチ、キャラメル種々」が出ている。





◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払\*・クレジットカード\*\*等がご利用いただけます。  
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

- ① 銀行振込の場合  
三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン(カ)
- ② 郵便振替の場合  
00120-3-41856 勉誠出版株式会社

- \* 代金引換払の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。  
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)
- \*\* クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。  
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書き  
いただければと存じます。

◆ 執筆分量・誌面二頁（一五〇〇字程度）ないし三頁（二三〇〇字程度）  
写真などが入る場合は、文字数をそのぶん減らしてください。

四〇〇字を目安に、適当な小見出しをお付けください。

◆ 入稿形式・テキスト形式（ワード、一太郎形式も可）

◆ 謝礼・ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。  
ポイントは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先：[mninfo@bensey.co.jp](mailto:mninfo@bensey.co.jp)  
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

先日、弊社刊『だからプロレタリア文学』の著者・樹沢健氏への取材（中日東京新聞）が行われ、同席して参りました。

当日は同書で論じられた中野重治の作品『交番前』にちなみ、早稲田駅改札を出てすぐの交番で待ち合わせ。六八幡宮で写真撮影をしたのち近隣の喫茶店へ移動取材開始となりました。記者の方と樹沢氏の年齢が近かったこともあり、終始和やかな雰囲気の中で、出版までの経緯から本書に込めた思い、現在の文学や社会の現状に対する意見などを語っていただき、一時間半ほどの対談となりました。対談中、特に印象に残ったことは、「歴史への入口としての文学」という言葉。小説を読み楽しむだけでなく、それをきっかけに過去の歴史を知る。過去の歴史を知ること、いまにも通じる、言葉や感情に共感することが出来る。問題意識を持つことが出来る。それが、文学が持つ可能性であり、力ではないか。この言葉に強く共感するとともに、「文学に何が出来るのか」という疑問に一つのヒントを与えられた思いでした。

記事は七月四日（日）、中日東京新聞朝刊の「この本この人」欄に掲載予定です。  
本書と併せ、是非ご覧になってください。  
(堀)